彼れはマントを擴げたり疊んだりして見た。其の度毎に見えたり隱れたりする。これなれば大丈夫と安心したが殘念なのは珠を入れた瓶をなくした事である。

其の時彼れの胸を衝いた聲がする。それは廊下に聞ゆるラヴエンガーとレオンテインの話聲だ。

＊　＊　＊　＊

病院の前でタクシーを乘り棄てたラヴエンガーとレオンテインは受付で聞くと今自働車に轢かれた人が擔ぎ込まれたと返事したので奥の方を見るとセヴアスチアンは丁度擔架で廊下を運ばれて行く所であつた。

訪問者は受付で記名する事になつて居るのだが、ラヴエンガーはレオンテインをセヴアスチアンの妻と記帳するを欲しなかつた。兎に角會へるか會へぬか知れぬ。けれども奥へ行つて見やうと、ラヴエンガーはレオンテインを連れて進み行つた丁度途中に醫員室と看護室とがあつたが誰れも見咎める人もないので二人はセヴ

アスチアンの病室の入口まで行つた一人の醫員が今此の室へ這入らうといふ所であつたが。立停つて

「貴方達は病室へ這入る許しを得てお出でゞすか」

「否」とラヴエンガーは頭を振つて、ですが、此の病室へ今自働車で怪我した人が來たでしやう」

醫員は「さあどうですかなあ」としらつぱくれて。

「此の病院の規則として病人の面會日は定つて居りますので普通の日には特に許可を要する事に成つて居ります」

レオンテインは醫員の腕に手を置いて、

「でも有りませうが重用な用事で參つたものですから」

と嘆願した。

醫員は頑として聽き入れなかつた。

ラヴエンガーは心に決するものゝ如く、醫員を押し除けて、レオンテインを連れつゝ中へ這入つた。

兩人は直ちにセヴアスチアンの寢臺の側へ行つた。

セヴアスチアンは妻の顏を睨んだ。レオンテインも負けずに睨み返した。

押し除けられた醫員は此の時、這入つて來て怒に堪へぬものゝ如くラヴエンガーの襟首を掴まうとした。

而し彼れが手を掛ける前、驚ろくべき光景にうたれて彼れは手を引いた。

驚ろくべき光景とは外でもない。セヴアスチアンの顏が忽として消え、肩も體も續いて消失した。

レオンテインは醫員に向つて。

「それだから重要の用事と言つたのです」

「何處へ行つたのでせう。一體どうしたと言ふのでせう」と醫員の開いた口は塞らなかつた。

第六卷　隱れマントの行衛

ラヴエンガーはぐるりと一廻りして、

「其處で饒舌つて居ないで僕の言ふ通りに成さい。その戸をしつかり押へてたとへ目に見えぬでも逃がしては成らぬ。あの男は身を隱す不思議の術を持つて居る惡漢だから」

と言ひつゝラヴエンガーは寢臺に近付いてセヴアスチアンを捕へやうとした。

敏捷いセヴアスチアンはすつかりマントを引つ冠つて他の空いて居る寢臺の上へ忍び込んだ。ラヴエンガーはあらぬ方を一生懸命搜して居る。

レオンテインは室の隅で只驚ろいて居るし、醫員はラヴエンガーの指圖通りに戸口を守つて居るのであつた。セヴアスチアンは寢臺から寢臺へと靜かに移り行くの

であつた。

彼れはこうして匍つて行く間にラヴエンガー等の捜つて居る格好を見て可笑しさに吹き出さうとした。そしてつい悪戯半分に側へ寄つて話しかけてやらうかとも思つた。

而し彼れは自分が今危期存亡の場合に際會して居る事を自覺した時に其の悪戯心も止んだ。

彼れは最も端の寢臺に來て見るとラヴエンガーは室の彼方の隅を捜して居る最中だ。セヴアスチアンは逃げるは此の時と窓から外を見ると此の病室が階下に有つたと思つたのが、二階の上にあるのでこゝからは到底逃げる事は出來ない。而し兎に角此處に居る事を示して其の騒ぎに他の方から逃げねばならぬと計畫を廻らした。

そこで棚の上にあつた消防用斧を手にして、窓に近寄り斧を振り上げ窓硝子を微塵に打壊した。

戸口を固めて居つた醫員は其の方へ走り寄つた。

「待て！」

とラヴエンガーも叫びつゝセヴアスチアンの足を掴んで引き摺り落さうとした。

豫めこう來るだらうと思つて居つたセヴアスチアンは、手にして居た斧をラヴエンガーの顔に打ち付けた。けれども其の瞬間彼れは身をかわしたので斧は背後の壁に當つた。

レオンテインは叫んだ。そして醫員は慄えながら戸の傍に痲痺した人の樣に突つ立つて居つた。

セヴアスチアンは此の隙に寢臺の下に潜り込んだ。ラヴエンガーは口惜しさに其の邊を撲ち廻つた。セヴアスチアンは赤い舌を出して床から床へ移つて行つた。

「其處御覽！」

と一つの寢臺の被布が皺に成つたのを見て、レオンテインは叫んだ。ラヴエンガー

は見當が付いたので、**セヴアスチアン**を遮らうとしたが、間に合はなかつた。

戸の所に監視して居つた醫員は鍬から棒に顔を強か撲たれた。そして彼れがよろめいて居る間に**セヴアスチアン**は戸を開けて階段の方へ走つて行つた。

所が彼れの運は盡きた。下の方から一人の小使が上つて來た。上からは**ラヴエンガー**が追ひかけて來て茲に挾み討ちの姿となつた。

ラヴエンガーは勿論、**セヴアスチアン**の逃げ行く方向を知つて居るけれども、小使の方では姿がちつとも見えぬので何が何やら薩張り判らない。

「抑へて呉れ！」

と言ふ**ラヴエンガー**の叫び聲は何の意味か判る道理がない。

魔誤〳〵して居る間に小使は**セヴアスチアン**と衝突してよろめいた。

ラヴエンガーはすかさず手を延ばして**セヴアスチアン**の着て居るマントを引つ張つたので顔が現はれた。

思はぬ所に顔が丁度空中に浮んで居る樣にニュッと現はれたので醫員は膽を潰して逃げ去つた。

階段の中途で**ラヴエンガー**は**セヴアスチアン**に飛び付いた。**セヴアスチアン**は又も隱れマントを頭から冠つたので再び消え失せた。

而し**ラヴエンガー**はいつかな離さない。二人は茲に大格闘を始めた。

此の騷ぎで看護婦やら使丁やらが此の場へ馳て來たが**ラヴエンガー**が階段の中途で一人芝居を演じて居るので不思議に思つて居ると。格闘が追々烈しくなるに連れマントが飜るので、**ラヴエンガー**の顔や手足が見えたり隱れたりする。之れを見て居る方では霧の中で首や手が躍つて居る樣で其の凄さと言つたら妖怪變化とより見る外はない。

看護婦の中では卒倒するものもある使丁は逃げ出すと言ふ混亂を生じて來た。**セヴアスチアン**でさへも此の光景に膽を潰した。

セヴアスチアンに取つては生命懸けの戰である。二人の力は殆んど匹儔して居るので中々勝負は付かなかつたが、どうした機かラヴエンガーは兩手に顏を抱えたので一氣に之れを下の廊下に投げ下さうとした。

セヴアスチアンは只しつかりと敵に獅嚙み付いた。若し自分を投げ出したら敵も一緒に冥土の供をさせてやらう。

階段の上に立つて居つた醫員は二人が組んだ儘下の篏木細工の廊下に撞と許りに落ち行くのを見た。下には多くの事務員やら使丁やらが見て居つたので直ぐ寄つて見ると、奇妙にも二人とも大した負傷も受けて居なかつたが、ラヴエンガーのみは撲ち所が惡かつたと見えて、しばし氣が遠くなつて居る間に、セヴアスチアンはラヴエンガーの掌中からマントを奪ひ取つて又もや身を隱して仕舞つた。

レオンテインが此處へ降りて來た時にはセヴアスチアンの姿は見えなかつた。彼女は茫然として愛人の傍に跪くのみであつた。

第十三篇　ラヴエンガーの本態

第一卷　地獄の鬼總出でも……

レオンテインが其處に跪いた時ラヴエンガーも亦消え失せた。多數の人の目前で消え失せて仕舞つた。

醫者や看護婦等の驚愕したのも無理はない、

「何處へ行つたんだらう」と皆訝つた。

レオンテインは皆に云つた。

「誘拐せられたのです。さあ警察署へ參りませう」

「此の上何と手の下しやうもありません。妾は存じて居ますがあの……」

と云ひさして彼女は言葉を切つた。どうして茲で説明した所で此の人達に信用を置かせる樣に云ひ得るものでない。

彼女は警察へ行つた。人々も之れに從つた。

レオンテインはありし次第を詳しく物語つたけれども、警官は只彼女の精神狀態を疑ふかの如く互に怪しき眼を交はすのみであつた、

巡査部長は皮肉に訊いた。

「一體どうして呉れといふのか。二人の隱見自在の男を搜索する爲めに市中を調べて呉れといふのか。

レオンテインは何と答ふる言葉もなかつた。部長は巡査等の苦笑を後に殘して這入つて仕舞つた。

かくして此の會見は不首尾に了つたのである。

レオンテインに從つて來た病院の助手達も何と言葉を添へる事も出來なかつた。

といふのは自分達が**ラヴエンガー**を見失つたのは視覺の錯誤でなかつたと疑つたからであつた。即ち**ラヴエンガー**は消え失せたのでなくて歩み去つたのではなかつたかと思つたからである。

かくして醫員は**レオンテイン**と別れて病院へ歸つた。**レオンテイン**は失望の胸を抱いて街へ出た。

街へ出た彼女は先づ**ラヴエンガー**の秘密實驗室へ行かうと其の方へ足を向けた。**多分ラヴエンガー**は其處へ歸つて居るかも知れぬ。**セヴアスチアン**は**ラヴエンガー**を抱えて行ける道理はない。それは**レオンテイン**が傍へ行つて跪いた時に彼れは半分意識を回復して居つたからである。

彼女がタクシーを驅つて實驗室の在る建物の前まで來ると、通り掛つた**パトリック、ムツクガイア**といふ男が面白さうに二人の男の子が拾つた瓶に就て言ひ爭つて居るのを見て居る所だつた。

七八歳とる見ゆる一方の男の兒が足に瓶が突き當つたので何氣なく拾ふて見ると中には豆位の黑いものが這入つて居る。丁度、チョコレートの豆の樣なので口へ入れやうとした時に他の方の稍齡上の男の兒がやつて來て、いきなり其の瓶を奪ひ取つた。

「お前は道で拾つた菓子を食ふなんて卑しい奴だなあ」

「何かまうもんか、砂糖菓子だぜ」

「食べちやいかん。こつちへよこせ」

「僕のだい。奪るといやだい」

大きな方の奴は瓶を奪つて高く揚げた。小さい奴は之れに飛び付いた。

傍に見て居つたムツクガイアは笑顏しながら、

「やれ〳〵」と使嗾かけた。

二人の子供は益々爭つて果ては泥の中で組打ちを始めた。彼方の巡査が呑氣さうにやつて來たが急に足を早めて、

「こら〳〵喧嘩はいかんぞ！」

鶴の一聲だ。巡査と聞いて二人の子供は瓶を泥の中に置いて、雲を霞と逃げて仕舞つた。

待ち構へて居つたムツクガイア君戰利品如何にと四邊を見た。瓶かち出た小さい珠は泥に包まつて見えなくなる力を失なつて、丁度チョコレート豆そつくりになつて居つた。

彼れはそれを手にして家の裏に廻つた。二三人のおかみさん達が着物を乾して居る所であつた。

「いいとスピールバーゲルのおかみさん。誰れかこれを召し上るお方でもありませんかなあ」と戯弄つた。

レオンテインがタクシーを飛ばしてやつて來たのは此の時であつた。彼女は表か

ら這入らうとしたけれども戸が開かぬので、裏の方へ廻つたらムツクガイア君とかみさんとが何か頻りに話して居る。

彼女の眼には直ちに例の瓶がとまつた。

「その瓶を妾に返して下さい。それは妾が落したもので中にはかけかへのない藥が入つて居るんです。御返し下されば五十弗差し上ませう。」

「それあほんとうですかい」とムツクガイアは眼を見張つた。

「本當ですとも」といふ、レオンテインの返事を聞いて彼の男が瓶を渡さうとした ら空中からニユッと只二本の手が出てそれをもぎ取らうとした。レオンテインは叫びつゝ顔を上げて見ると矢張り空中に二つの眼が光つて居る。それはセヴアスチアンの眼であつた。

セヴアスチアンはマントに身を蔽して何時の間にか此處へ先掛けして居つたのである。

二人はしばらく玆に瓶の爭奪を始めた空中に動く眼と手を見て、おかみさん達はあまりの事にぼんやり見て居る許りであつた。

やがてレオンテインの方の形勢が惡くなつて來て彼女は思はず手をゆるめると、瓶を下に落して仕舞つた。

見物して居つたムツクガイア先生は手を伸してそれを拾つた。怪しき空中の手は彼れの肘をムヅと許りに掴んだ。彼れは力任せにそれを振り離して其處にあつた洗濯棒を執ると見當かまはず縱横無盡に振り廻した。

どうした機か棒は頭にでも中つた樣にコツンと音がして何やら倒れた樣の響もした。滑稽な樣な話だが實際だから仕方が無い。

ムツクガイア先生棒を風車の樣に振り廻せば、運よくも空中に現はるゝ一つの手に發止と當つたので手は肘からでも折れた樣に下に落ちた。おかみさん達はこれあ瓶の中に魔物が這入つて居るからだらう位の得手勝手の説明を付けて居つた。

暫くするとムツクガイアは振つて居つた棒を止めて立つた。しかし、油斷なく棒で身構へしながら一禮すると共に其の瓶をレオンテインに渡した。愈々五十弗にありつかうといふのだ。

「どうか妾がそれを安全の場所へ藏ふまで、大切に守つて置いて下さい。そうして下されば五十弗の代りに五百弗御禮致します」

「え、五百弗……」

と男は眼を圓くして、

「五百弗なら地獄の鬼共總出で來てもやつ付けて見せます」

「それじや直ぐ參りませう」

「ではお供致します奥さん」

だが實際のところレオンテインは何處へ行かうといふ當てがないのだ。セヴアスチアンの家へは何としても歸れない。ふと氣の付いたのは市の繁華な處に在る婦人

專門の旅館であるこれならば大丈夫と思つて。

「では地下鐵道で參りませう」と其の男を促がした。

第二卷　鐵橋から眞逆様

ムツクガイヤー先生は護衛兵といふ格でレオンテインに付き添ふて地下鐵道停留所へと歩き出した。餘り長い道中ではないけれども一帶に淋しい裏町でおまけに高い鐵橋を渡つて行かなければならなかつた。ラヴエンガーはなるべく秘密實驗室が人目に知れぬ樣故意とこんな淋しい所を撰んだものらしい。

鐵橋の下は河になつて居つて河岸には鐵道が敷設せられて居つた。彼等が鐵橋近くへ來た時に幽かに汽車の進行して來る音を聞いた。

橋の傍に工夫の道具を置く小舍があつたが、其の前を通る時そこの壁に立て掛けてあつた鐵挺が急に上つた。レオンテインは悲鳴を揚げて男に縋りついた。

鐵挺を持つて居るのは二つの手である。今にもムツクガイヤーの腦天目がけて打卸さんとして居る。

レオンテインは男を引き寄せ樣としたが彼れもさるもの飛鳥の如く身をかわしたので鐵挺は頭をかすつて地に打ち卸された。彼れは今度は猛然として敵に躍りかゝつた。

レオンテインは手の下しやうもなく二人の鬪を見て居つた。

セヴアスチアンは中々强い男である。ムツクガイヤーは之れに劣らぬ筋骨逞ましい男であるが惜しい哉勞働で鍛へた筋肉だから敵程には自由に働けぬ。一歩〳〵彼れは鐵橋のレールの方へ押し詰められた。

かくだん〳〵押し詰められた彼れはとう〳〵鐵橋から下へ落ちて仕舞つた。其の時汽車は轟々の響を立てゝ下を通過して行つた。

二つの手はさも滿足した樣にレオンテインにかまわずに消え失せた。さるにても

瓶は何處へ行つたらう。二つの手に入つたらうか。

レオンテインは瓶の事を考へて居る暇はなかつた。橋の上から下の河を覗いて見ると落ちた。ムツクガイアーは橋の支柱を攀ぢて來る所であつた。

「未だ此のムツクガイアーは幽靈などに負ける程耄碌はしない」と彼れは快活に云ひながら橋の上へ這ひ上つて來た。

所が又もや先刻の二つの手が顯はれて、彼れの頭を捕へた。烈しい格鬪が再び演出せられた。今度もセヴアスチアンが優勢である。

二人は爭ひつゝだん〳〵橋の中央部に來た。下は線路でなくて河となつた。セヴアスチアンの力が優つたか、相手を橋の上から下へ投げ飛ばした。ムツクガイアーはくる〳〵風車の樣に旋回しつゝ水中に落ちた。

落ちた男は水中へ沈んだ。レオンテインがガタ〳〵慄えながら下を見下した時に二人の男を乗せた一艘のボートが其の落ちた場所へ近づいて來た。

間もなく頭が水面に浮んで來た。そして彼のボートの中へ救ひ上げらるゝのであつた。

レオンテインは一生懸命で橋上を走つて河の對岸へ到り、**ムツクガイアー**を助け乘せて來る舟を波止場の上に迎へた。

「負傷しなくつて？」

「此の**ムツクガイア**さんを負かすには幽靈如きものでは駄目だ」

と濡れ鼠の樣な先生は負け惜みを云つた。

「瓶はどうしましたか」と**レオンテイン**は問ふた。

「水の中へ落して仕舞ひました」

と申譯なさそうに答へた。

レオンテインは當惑したが氣を取り直して。

「そんなに心配するには及びません。瓶はあの幽靈の手には入りませんでした」

彼女は男に名刺を與へて語を續けた。

「妾は宅へ歸ると直ぐ小切手をお屆け致します。瓶は失くしましたけれども生命がけで御盡力して下さいましたらかお約束の五百弗差し上げます」

「**ムツクガイア**は快活に隨分手硬い奴でした。又た出て來たら何時でも幽靈と鬪つて上げます」

二人共瓶は一度水中に沈んでも再び浮んで來るといふ事を氣付かなかつた。もう少し待つて居つたなら、或はその瓶は彼等の手に戻つたかも知れなかつたのだ。

瓶は流のまに〳〵浮きつ沈みつ流れ下つて、とある棧橋に止まつた。只見る二つの手が空間から出て來てそれを拾ひ上げて仕舞つた。

＊　＊　＊

病院の階段から**ラヴエンガー**と組打のまゝ墜落した**セヴアスチアン**は、**ラヴエンガー**の半分氣絶して居るのを自分のマントの中に抱え込んで街へ出で、辻自働車に

飛び込んだ。病院の人達は二人共消え失せたのには大騒ぎをやつたのも無理ならぬ事だ。

セヴアスチアンは運轉手に町外れの自分の隱れ家に行く樣に命じた。

此の隱れ家といふのは豫て**セヴアスチアン**が用心の爲めに設けて居つたもので、市から程遠からぬ所にある自働車々庫の二階にあつて此處から七八町離れた小さい家に運轉手と留守番夫婦を養つて居つた。勿論**セヴアスチアン**の變名の外其の本姓は此等の人に判らなかつたのである。

レオンテインは曾て此の隱れ家のある方面を知つて居つた彼女が未だ**セヴアスチアン**と同棲して居つた時分、**セヴアスチアン**が大層華美に裝ふた一婦人と同乘で此處へ這入つたのを見かけた事もある。其の時は苦しげな辯解をしてどうか運轉手に本名を明さんで呉れと賴んだのであつた。

彼は今此隱れ家へやつて來た。よし**レオンテイン**が氣付いたにした所で自分の所

在を警察へ密告する樣な事は萬々あるまい。

こう安心して彼れは此の隱れ家へ赴いた。

第三卷　僕の妻に熨斗を着けて

其の隱れ家の前まで來ると自動車から降りた、**セヴアスチアン**は二階へと上つて行つた**ラヴエンガー**を運んで來たのだけれども例のマントをかけてあるから運轉手には薩張り氣が付かなかつた。

彼れは夢寢の間に彷徨して居る**ラヴエンガー**の手足を縛してさも得意そうに之を見下した。

こうなつてはこつちのものだ。此の世の中で最も憎んで居る。

ラヴエンガーは捕虜となつて仕舞つた。生かさうと殺さうとこつちの心の儘だ。

しかしまだ安心してならん事がある。**レオンテイン**を捕へぬ間自分の舊惡暴露は

絶對安全といふ譯には行かぬ。彼れは南米産の藥で一定時間魔睡せしむるものをラヴエンガーに施し錠をかけてレオンテインの捜索に出掛けて行つた。

隱れマントを身に纏ふて町を歩く事は彼れに取つて始めての事だ、自轉車に乘つた一人の小僧が彼れの傍をすれ〳〵に走つて行つたが輪がユラ〳〵動いたので小僧は靜かに歸つて來て何か觸つたらうと其の邊を捜して居つた。そんな滑稽の事もあつた。

折角ラヴエンガーの秘密實驗室から盜み取つた珠を何處のかへなくして仕舞つた第一にそれを捜し出さなければならん。それにしてもあの珠は何の役に立つものだらうなどゝ考へつゝ實驗室の裏手へ廻つた時ムツクガイア君がレオンテインに其の瓶を渡さうとして居る所なので横から之れを奪つたのである。此の事は既に前に詳しく述べたのだから改めて書く必要もないが彼れがムツクガイアを鐵橋から投げ込んで瓶を河から拾つて隱れ家へ歸つて來た時にラヴエンガーは魔睡から醒めた所で

あつた。

セヴアスチアンは怎うかして珠の効用を聽き出さんものと、ツカ〳〵と傍へ寄り

「さあこうなつては仕方がないだろう。それでも何とか出來るつもりかね」

ラヴエンガーは泰然自若として、

「ナヴアル君、君の運の詰まりだ」

「何！運の詰り、それは君の事だ。一體此の珠は何の用に立つのか、本當の事を話し給へ」

「僕は嘘と坊主の頭はいふた事がない」

「實際の事を云はんと爲めにならんぜ。もう勝敗は定まつたのだ。僕はマントも珠も手に入れた。此の上手に入れるものがあるとすれば君の生命許りだ」

ラヴエンガーは微笑した。

セヴアスチアンは尙ほ凄い文句を並べた。

「僕は必要のないのに無暗に殺生をする者じやない。君一人位生きやうが死なうがそんな事は構はんが只聽きたい事は珠の用法だ。君の實驗室で君がレオンテインに珠の色が黑い事を説明して居つたのを聽いたが其の他の事は聽き洩した。どうか其の用途を話して貰ひたい」

「あれは食べるものです」

ラヴエンガーは雜作もなく云ひのけて、

「決して體には有害でない。食べると腹の中まで黑くなつて仕舞ふ、君は既に食べぬ内から腹黑だ」

こゝまで云ふとセヴアスチアンは見る〳〵顏色を變へた。生殺與奪の權を持つて居る捕虜からかくも侮辱を加へられるとは彼れの堪へ得る所でない。

「馬鹿にすると其の分には置かぬぞ……さあ其の珠の用途を眞面目に話せばよし話さぬ時には生命はないぞ。マア考へ直しても見給へ。此の秘密を知つて居るのは

君と僕丈けだらう。若し妥協してやつたら隨分面白い事も出來るぜ、若し又僕の妻が邪魔になるといふなら、それは熨斗を着けて君に進上する。僕はもう妻の事は諦らめて居るのだ」

若しレオンテインがラヴエンガーの妻になればチヤリーに對する執着は消えて自分の前途は安固となる。レオンテインとラヴエンガーの間に愛が萠して居る事はよく解つて居る。チヤリーを忘れしむるにはラヴエンガーに結婚させるに限ると彼れは考へた。

併し彼れの此の考へもラヴエンガーの次の答を聽くに及んで根本から破壞された。

「卑怯者奴！　貴樣の樣な犬野郎には物言ふ口がない！」

第四卷　火は燃え上つた

セヴアスチアンは何か考へ付いたらしく、

「そうだらう君の口からまさか話せまい。だが記錄を手に入れゝばそんな事は判る話だ」

さては珠に關する記錄の事も既に知つて居るのかと。**ラヴエンガー**の顏は蒼白に變じた。正しく急所を衝かれた譯だ。

其の所在も判つて居る。先づそれを取つて來てそれから君を片付けてやる」

殺してやるといふ意味だ、瓶の珠の用途を慥かに究めてから殺す方が得策と考へたから、彼れは暴々しく**ラヴエンガー**を蹴飛ばして出て行つた。

＊　＊　＊　＊

珠は河中に流して仕舞ふし、マントは**セヴアスチアン**に奪はれたし、**ラヴエンガー**は踪跡が判らなくなつたので**レオンテイン**は只々失望の淵に呻吟した。

只一ッ記錄といふもの丈け殘つて居るあれがあれば又何かの手掛りともならうかと彼女は實驗室へ引つ返した。金庫の暗號はよく記憶して居る。なぜ早くこれに氣

が付かなかつたかと悔んでも見た。

裏口から這入つて階段を上つて來て**レオンテイン**は實驗室の前で立止つた。戸の鍵を以つて居ない事に氣が付いた。

希望は變じて失望となつた。餘り心が取り込んで居つたのでこの事はすつかり忘れて居つたのだ。彼女は自暴半分に把手を廻してみた、どうした事か嬉しや戸は開いた。

そうだ。**ラヴエンガー**と二人で出た時に直ぐ歸つて來る積りで錠を下さないで出て行つたのだ、こんなに長くかゝつてしかも、**ラヴエンガー**の行衛不明にならなかつたのを考へると轉た運命の奇なるを感ぜざるを得ないのである。

室を見廻せば元の通りになつて居る**セヴアスチアン**の來る樣子は少しもない。

心の急いて居る時は仕方のないもので室の戸に錠を卸す事を忘れて。彼女は其の儘金庫の前へ行つて暗號と照合しつゝ扉を開け、中から記錄を取り出した。

彼女がそれを擴げて讀まうとして居る時に何だか音がして室の中に他の者が居る樣な氣がした。四邊を見廻すけれども誰れも居ない。

戰く胸を押し鎭めて彼女は讀み出した。

大方の諸君に告ぐ

科學者**ジョセフデッキスター**たる余は「狂神巖」に於て二個の財寶を發見せり一は黃金にして「海上王」ヘンリー、モルガン卿の遺財なり、余之れを發見す他は余自身の製作せるものにして余の遺骸の掌中に在る三個の珠之れなり。此の珠は發見者に夢想だも及ばざる奇蹟を顯はす。即ち……」

と玆まで讀んで來ると今度は判然人の氣がした。振り返ると**セヴアスチアン**がぬつくと突き立つて居る。彼れはマントを脫いだのだ。

「それを私に渡せ……」と彼れは一歩進んで云ふた。

「どういふ譯でこれが欲しいのです。貴方は邪魔になる敵を皆片付けたんだから早く逃げたらいゝじやありませんか」

「何、僕は其の記錄が必要なのだ。僕は黑い珠の瓶を手に入れたから其の記錄に依て其の用法を知り度いのだ」

「決してお渡しする事は出來ません」

「渡せ……」

レオンテインは逃げ出したけれども、戶の處で捕まつてとう〳〵記錄を奪はれて仕舞つた。

レオンテインは奪られては大變と隙を窺つてとり返し金庫の中へ仕舞つて扉を締めやうとしたが鐵の重い扉は至つて敏活に動かない。其の內に又もや**セヴアスチアン**はそれを奪つて仕舞た。

レオンテインは其の腕に獅嚙み付いたけれども男の力で投げ付けられたので、金庫の角で頭を打ち付けて昏倒して仕舞つた。

セヴアスチアンは四邊を見廻して凄い眼をした、レオンテインを玆で殺して仕舞ふといふのだ、幾度も〳〵殺さうとして果さなかつた。こんな好機會を措いて又と決行出來るものでない。彼れは燒き殺さうと心に決した。

室の中には藁や鉋屑の塡つて居る箱が澤山あつたが。此の室は堅牢な樫材で作つてあるから只それ丈けではとても燃えつきさうもないので、彼れは椅子やテーブルを其の上に積み重ねて天井の半分まで高くした。

其の時レオンテインは追々〳〵意識を回復し始めたものゝ如く唇を動かし始めた。

セヴアスチアンは好奇心に驅られて傍へ寄ると、彼女は只一語、

「ラヴエンガー」と叫んだ。

セヴアスチアンは急いでマッチを擦つて火を點けた。

火は直ちに燃え上つて烟は室中に渦卷いた。

第五卷　生命を繫ぐ電線

セヴアスチアンは室を出て外から錠をかけ鍵をポツケット入れた。そしてマントに身を包んで階段を降りて行つた。

こうなれば二度と彼女に煩はされる樣の事はない。これで生命が助かるなら彼女は不死の術を持つて居るのだ。

彼れは安心して隱れ家へ歸つた。

＊　＊　＊

セヴアスチアンの隱れ家に手足を縛られ乍らも、ラヴエンガーは只レオンテインの身の上を氣遣ふた。自分が病院で見えなくなつて以來必ずや搜し廻つて居るに違ひない。そして秘密實驗室へ行けば必ずそこでセヴアスチアンに出遭ふに定つて居る。

どうかして救ふてやらねばならぬと、**セヴアスチアン**が出て去ると同時に**ラヴエンガー**は自由にならうと藻掻いたが兩手は後に縛され兩脚は堅く卷かれて居るので動けば動く程繩は肉に喰ひ入る許りだつた。

彼れは藻掻くのを止めて四邊を見廻した。何かよい逃走の方法を見付けねばならぬ。室の一隅に同じ屋敷の家に接續して居る電鈴の線が二本あつた。

彼れは芋蟲の樣に床の上を這つて其の電線の傍まで擦り寄つて兩足を電線に押し付け、膝の處に二三寸の弛みがあるのを利用してそれを背後の横梁に擦り始めた。

凡そ十分間もこうして擦り付けて居つたらう。電線の覆被は漸く切れて中から赤いゴムの覆が現はれて來た。尙ほ彼れは力を極めてゴムを擦り切つて銅線をむき出した。

動く度に繩が身體に喰ひ込んで其の痛さは譬へ樣ない。二本の電線の銅が出たので彼れは其れを約半分間も接觸せしめて居つたが、力盡きて其儘其處へ倒れて仕舞

つた。

半分間續け樣に鈴が鳴つたら如何な呑氣な人の氣も引くだらう。

此處から七八町離れた家に住んで居る**セヴアスチアン**の運轉手が嬶の傍で煙草を燻らして居るとけたゝましい電鈴が鳴つた。

「又子供達が車庫へ這入つて惡戯をして居る。ちよいと良人、行つてはたき出して來ましやうか」

運轉手は此の頃流行る離婚訴訟の記事を讀んで居つたが、

「そんな事する必要もないぢやないか」と、口の中で氣のない返事をした。

「でも良人、こんなにいつまで鳴らして居て五月蠅ではありませんか」

運轉手の**ヘンリー**は新聞を置き帽子を冠つて子供を追ひ出しに出掛けて行つた。

彼れは腹立しさに顏を赤くして車庫へ這入つて行くと下には誰れも居らぬのでどんどん二階へ上つて行くと其處に**ラヴエンガー**が縛された儘倒れて居るのを見付けた

「どうしたんだね？」と、運轉手は驚ろいて訊いた。

「どうもこうもない。一刻もこうしては居られない。君の主人の奥さんの命が危い僕はこうやつて縛られて仕舞つた。愚圖〳〵して居る場合でない。兎に角繩を解いて呉れ給へ。それから自働車の用意を直ぐ……」息も吐かずに促した。

運轉手はナイフを出して繩を切つた。兩腕の繩の痕が紫に腫れ上つて居る。

「誰れがしたのだい」と、運轉手は訊いた。

「兎に角自働車を出して貰ひ度い。そうすればそこへ連れて行く」

二人は共に階段を馳せ降り自働車を出して市街へ乘り入れた。

「もつと早くとラヴエンガーは運轉手の耳元で叫んだ。

「奥さんの命が危い。若し救助の間に合へば君に五百弗の報酬をやる。巡査が邪魔したらかまわず乘り切つて仕舞へ」

＊　＊　＊

レオンテインが氣が付いて見ると實驗室は黑煙で一杯になつて居つた。最初は自分は今何處に居るか判らない。森の中の小舍でビアンカと一しよに居るのではないかと思つて出入口を捜し廻つた。

やがて彼女はラヴエンガーの實驗室で、セヴアスチアンに記錄を奪られた事を想ひ起した――！がさてそれがどれ程前であつたか記憶してない。

黑煙は室に漲つて戸口の方へは近寄れない、室の中央には火炎が立昇つて天井や垂木を舐めて居る。

其の時窓の外で雷ならぬ叫聲が聞えた。

第六卷　私の本名は……

叫聲を聞いてレオンテインは窓際へ走つて行て見ると外には一群の人達が騷いで居る。

「今消防隊が來るから飛び降りずにじつとして居れ」と、下の人達は聲を限りに云ふけれども彼女の耳には聽き取れなかつた。

窓は高い所に在るので飛び降りれば死ぬに定つて居る。**レオンテイン**は火炎の室を突き切つて戸口まで來た。

やれ嬉しやと開けやうとすれば鍵は堅くかけてある。

自分がかけた覺えはない。

「**セヴアスチアン**が自分を燒き殺すつもりで火をかけて、戸に錠を下して逃げたのだ」と、彼女は考へると憤怒に沮喪した意氣も回復して滿身の力をこめて戸を蹴つた。扉は鋼鐵で作えた樣に頑として動かない。

力も氣も盡きて彼女は戸の内に伏した。煙は濛々として彼女を窒息せしめやうとした。

チヤリー！ラヴエンガー！二人の姿は幻の如く彼女の胸を往來した。二人の懷

しい人は彼女の心を天つ御國へ抱き行くもの丶樣であつた。

處へ階段に足音が聞えた。

救ひの神**ラヴエンガー**が裏口から這入つて來たのだ。

ラヴエンガーは扉に肩を當て丶一度！二度!!三度!!と力をこめて押した。扉はメリ〳〵と音して半分開いた。中から黑煙が烈しい勢ひで吹き出して、其の間に**レオンテイン**の姿が浮き出した。

ラヴエンガーは兩手に**レオンテイン**を抱いて階段を降りて行つた。

窓と戸から這入る風に煽られて愈々威を逞しうして來た火炎は二人を追ひ驅けて來た。**ラヴエンガー**は小兒の樣に輕々と**レオンテイン**を抱へて裏口から曩に瓶を拾つた兒のかみさんの所までやつて來た。

「水を一杯下さい」と、喘ぎながら乞ふた。

ムツクガイアは何處からかやつて來たか、**ラヴエンガー**は見た事のない男なので

「それから記錄もよ」と、しばし言葉を切つて

「しかしこうやつて貴君さへ生きて居て下されば何も要りませんわ」

「貴女は私を愛して下さる？」と、ラヴエンガーは容易に信を措かぬものゝ如く言ふた。

彼女は容を改めて。

「貴君がいつぞや妾に心中を打明けて下さつた時、妾の心は既に數年前此の世を去つたチヤリーのものであるからといふて貴君の愛を御辭退致しました。しかし其の後つく〳〵考へて見まするに妾はチヤリーに誓つた愛を汚す事なしに貴君を愛する事が出來る。若しチヤリーが此の事を知つたなら定めし喜ぶ事と信じます。妾は何だか墓の中の――いや天國に居るチヤリーが貴君の愛を受ける事が決して貞操を傷けるものでないとの命令が來る樣に思はれるのです」

彼女は言葉を止めてラヴエンガーを見上げ、手を男の腕に載せて、

彼方へ行けと命じた。

「其の奥さんは私が生命がけで働いて上げたので五百弗呉れると約束した人だ」と彼れは云つた。

其の聲が耳に這入つた爲か、ラヴエンガーが額に水を注いだ爲か、レオンテインは微笑しつゝ手を差し出した。

ラヴエンガーも嬉しさに彼女の傍に跪いた。

互に死んだと思つて居つた愛人が再會したのであるから其の喜びは言ふ丈け野暮だ。

レオンテインはラヴエンガーの耳に口を寄せて、

「お懐しう御座います」と、囁いた。

「マントも珠もセヴアスチアンが奪つて仕舞ひました」とラヴエンガーも小聲で言つた。

「ラヴエンガーさん。妾が先日貴君の本名を伺つた時に只妾の『護る影』とのみ仰有いました。ラヴエンガーさんどうか今度こそ本名を明かして下さい。それから妾を護つて下さる譯を話して下さい」

ラヴエンガーの心は千々に亂れた。明かすべきか、明かす可らざるか。彼れは意を決せるものゝ如くレオンテインを顧みて。

「レオンテインさん。それでは本名を明かしませう。私は……」と、云ひさして彼れは急に言葉を切つた。

セヴアスチアンの顔が向側の家の窓に現はれたからである。勿論體はマントで包んであるから見えない。

ラヴエンガーはレオンテインを離して街を横切つて其方へと走つて行つた。

第十四篇　絶對的黑色

第一巻　力を失つたマント

『二兎を逐ふものは一兎を獲ず』といふ諺がある。セヴアスチアンは其の呼吸を知つて居るのでラヴエンガーを後廻しにし、先づレオンテインの燒け死ぬのを見屆けて置かうとかくは向側の家の窓から見て居つたのである。

此の向側の家といふのはホワイテイー、ワングといふ名前丈け聞いては支那人の樣な白人の住居で此の男はセヴアスチアンの舊い知合であるのだ。

此の家で彼れはジヨセフ、デツキスターの記錄を調べ始めたが一寸位見たのでは意味が徹底しないので何れゆつくり研究しやうと其の郵送方をワングに依賴した。

「此の包を中央信用會社に頼んで、僕の安全保管函の中へ藏つて置く樣にして下さい」と、珠の這入つた瓶と共に渡した。

ワングがそれを持つて出て行かうとした時に彼れは一寸呼び留めて、窓から下を指し、

「おい〳〵彼處に一人の男が居るだらう」

「居ます」

「彼の男は僕をつけ覗つて居る男だ、彼奴に奪はれぬ樣にして奥れ給へ、よく顏に見覺えして居て貰ひたい」

「よく見覺えした」

ワングは答へて其の書物の包と瓶とを持て下へ降りて行つた。

「はてな、安全保管函の中へ藏つて奥れと頼まれたがひよつとするとこれは容易ならぬ貴重なものかも知れんて」と、考へながら其の儘地下室へ降りて行つた。

小人珠を抱いて罪ありとは此の事だ。

地下室には鼠穴や頭の黑い鼠の穴が澤山あつた。**ワング**は其の穴から見當違ひの裏口の方へ拔け出た。**セヴアスチアン**をはめてやらうといふ意志は明らかであつた

殘つた**セヴアスチアン**は窓際へ行つて**ラヴエンガー**を監視して居ると彼れは自分を見付けたと見えて急いで此方へ走つて來る、しかし此のマントさへあればどの途大丈夫だと腰を下して居ると、**ラヴエンガー**は階段を昇つて來る、今二三段といふ所で、**セヴアスチアン**は身を飜して一番端の室へ飛び込んだ。

此の建物は大分古いのでどの室の扉も皆破れて錠の滿足にかゝるものとてはない

奥**セヴアスチアン**の這入つた室のみは修繕してあつて戸も丈夫であつた。彼れが室の中央に蹲つて居る時に**ラヴエンガー**が這入つて來た。ほんの二三歩眼前に居てもマントのお蔭で姿は更に認められなかつた。

ラヴエンガーは室に這入つて窓から下を見た。此の室は五階の上にあるので此處

からセヴアスチアンが飛び降りたとも思へない。彼れは元の戸から廊下へ出て鍵穴に箝つて居つた鍵をかけ、鍵は自分のポケットに仕舞ひ其の儘階段を下つて行つた

セヴアスチアンは體の善い檻に入れられて仕舞つた。彼れは其の腕力を以て戸を開かうとしたけれども能はなかつた。こうなつては只賴むべきはマントの魔力のみである。

彼れは肩からそれを脱いで見た。見える、今度は裏を返して見た、矢張り見えるマントは其の魔力を失つたのだ。

望の繩が切れて仕舞つた。實に運命程奇なるものはない。數分間前まではいかなる敵も征服する事が出來る偉力を持つて居た彼れも今は檻に閉ぢ込められて破滅の到來を待たねばならぬ。

窓から下を見るとラヴエンガーは二人の警官と何か話して居る、危機が切迫して來た。彼れは戸を蹴破らうとした。けれども頑として動かなかつた。

再び窗際へ來たセヴアスチアンはラヴエンガーと警官が家の中へ這入つて來るのを見た。五階の上から下まで飛び降りれば身體を粉碎さるゝまでだ、幸にも彼れは窓の外側に水管が取り付けてあるのを見て、それを攀ぢ登つて屋根の上へ出やうと心に決した。

彼れは少年時代にこういふ運動には慣れて居つたので愈々窓を拔け出て登り始めた。

併し時は既に遲かつた。

一人の警官はラヴエンガーと共に此の室へ這入つて來たがセヴアスチアンが窓から拔け出て屋根の方へ登つて行くので、彼等は階段を登つて天窓から屋根へ出やうとした。

セヴアスチアンの惡運盡ずしてか、天窓の戸は錆が付いて明かない。其の隙に屋根へ登り上つた彼れは家の反對の側に取り付けてある非常梯子を降り行くのであつ

た。

第二卷　唇と唇と……

下の方に張番して居つた一人の巡査は非常梯子から降りて來たセヴアスチアンを見て一段昇りかけて叫んだ。手にはピストルを持つて居る。

「神妙にせい！神妙にせい！」

セヴアスチアンは兩手を擧げて降參の意を表した。

巡査はピストルを口に咬へて梯子の頂上に止つて居るセヴアスチアン目懸けて猿の樣に攀ぢ上つて行つた。

セヴアスチアンは挾み討ちの姿となつた。

何氣ない體でセヴアスチアンはラヴエンガーの方を見た。今し天窓を出て來る處だ。續いて警官も出て來た。

警官が屋根に足をかけるが否やセヴアスチアンは躍りかゝつて猛烈な組打を始めた。

セヴアスチアンは巡査の頭に腕を卷いて他の手で其の喉を締めたので、彼れは目も眩みピストルを離して仕舞つた。

セヴアチスアンは其のピストルを拾ひ取つて、非常梯子に身を支へて居る巡査を狙つて一發放した、彈丸は誤たず心臟を貫いたので、どうして堪らう。遙か下の街路へ墜ちて行つた。

ラヴエンガーは猛虎の樣にセヴアスチアンに向つたが短銃の柄でしたゝか撲られたので背後へよろめいた。

其の隙にセヴアスチアンは梯子を降らうとした。

もう一人の巡査は梯子の一番上の桁の上で彈丸のなくなるまで擊ち續けた。しかし兩人の間が大分隔つたのと桁が邪魔になるので彈丸は徒らに空を切つて行つた。

セヴアスチアンは其の間に降り切つて雑踏の中へ姿を沒して仕舞つた。

＊　＊　＊　＊

ラヴエンガーが實驗室から飛び出して向側の家へ消え去つてからレオンテインの胸は普通でなかつた。セヴアスチアンが拔け出た窓も、非常梯子もレオンテインの方からは薩張り見えないので事の成行は判らなかつた。

傍に居つたムツクガイア君は慰め顏に、

「直ぐ歸つていらつしやいましやうから御心配は要りません」

待てども〳〵中々歸つては來ぬので彼女の心には漸く不安を感じ始めた。よし何時間待たうと構はん。又何日待たうといとはない。ラヴエンガーは彼女にとつて全世界よりも貴重なのである。

人間は一寸先を豫知する事が出來ない。曾てヂヤリーと甘い戀を語つた時に決して其の結婚しない内に死の神が二人を割かうとは思はなかつた。吾々の眼の前には

『未來』といふ黑幕が垂れてあつて吾々は其の前に暗闘を演じて居る役者である。ラヴエンガーと今別れたがしかし果して無事で歸つて來るであらうか。運命の神はどんな惡戯をしないと限つたものでない。

彼女は色々の事を考へながらスピールバーゲルのおかみさんの庭に立つて居つた其の時耳を劈く銃聲が向側の家で起つた、彼女は恐ろしさに思はずムツクガイアの腕にすがつた。

「奥さん、心配するには及びません。ぢきに歸つてお出でになります。此の邊の無賴漢はいつもピストルを撃ち合つて居ります。今の音はタイヤがパンクした音かも知れません」と、ムツクガイア君は一向呑氣である。

其の内に群集は其の家の方へドヤ〳〵と走つて行つたので、いくら呑氣のムツクガイア先生も其の後から行つて見た。

レオンテインは若し今の銃聲がラヴエンガーが撃たれたものならどうしやうと戰

いて居る、しかしこれはセヴアスチアンが巡査を撃ち殺した銃聲であつたのだ。

垣に取り付いて恐怖に慄えて居るレオンテインの眼の前にラヴエンガーが現はれた。

「よくまあ無事で！」と、いふ喜び聲が思はず迸つたが自分の戀を自覺したのはほんの一二時間前であつた事を想ひ出して彼女の顏に時ならぬ紅葉を散らした。

「レオンテインさん、私は今後どんな危難が貴女の身にふりかゝつて來ても必らず私が護つて居りますから大船に乘つた氣でいらつしやい」

彼れはこういつてレオンテインを抱き締め、心行く許り接吻をしやうと思つたけれどもスピールバーグルのかみさんが變な眼で此方を見て居るので只言葉を續けて、

「私はセヴアスチアンを見付けたから追かけたのですがとう〳〵逃げられて仕舞ひました」と、云つた。

「先刻の銃聲は？」

「私に撃つたんじやないんです」と、一旦切つて、

「レオンテインさん、若しセヴアスチアンを捕へる事がどうしても出來ず、又チヤリーに對する犯罪の自白をさせる事が出來ぬとすれば、何時此の搜索事業を止めますか」

「何時までも止めません」と、優しい言葉に强い決意を示した。

「併し貴女は私を愛して下さる？」

「愛しますとも。だが妾は未だ待たなければなりませんでしやうか」

ラヴエンガーはしばし躊躇して居つたが、やがて承諾の意味で頭を一寸さげた。

彼れは兩腕にレオンテインを抱へた。レオンテインは首を上げた、二人の唇は茲に始めて相合したのである。

「私も此の探索は決して止めません」と、レオンテインを離して彼れは云ふた。

「私はこれから出掛けますが、好んで危險な地へは這入りませんから御心配なく…

……それからどこで再びお目にかゝられましやうか」

彼女の住所を詳しく聞いたラヴエンガーは帽を一寸脱つて其の儘此處を去つて行つた。

＊　＊　＊

古い書物の包と珠の入つた瓶とを預けられたワング君は考へて見た。こんなものを安全保管函に藏つて呉れなどゝは狂人の仕業だ。それとも此の品には何か餘程重要な意味があるのだらうか。

第一癪に觸るのはあの野郎一文だつて心付を呉れるでなし、いくら我輩だつて口もあれば胃の腑もある、金を呉れないで用事許り言ひ付けたつて働けるものか。

彼れは書物を上衣の下に入れ瓶を手に持つて、彼れがもう一つの隱れ家のある貧民窟の方へ足を運んだ。

第二卷　果してヂャリーか

途中でワング君は又考へて見た。一つ此の書物の内容を見てやらうか、若し一文の價値ないものならセヴアスチアンの氣はどうかして居るのだ、一體どんなオだらう。まさか歌や詩の本を材料にして脅迫取材も出來んて。

或る家の戸口でこつそりと本を開いて見た。何の事だい何かの旅行記だ、處々に暗號を使つてあつて何が何やら意味が判らん、

こんなくだらん物なら頂戴しても難有くはない、これを命ぜられた通りに中央信用會社へ持つて行かう。

彼れが歩いて行くと彼方に若い亞米利加娘（レオンテイン）が一人の愛蘭人、（ムツクガイア）に別れを告げやうとしてゐるのを見た、こんな事は何處にもある事で、御當人薩張り面白くも何ともない事だがレオンテインの方では驚ろいた、彼

女は敏捷く男の持つて居る書物と珠とを見付けて急いでムツクガイアの方へ取つて返し、

「彼の男の持つて居る書物と珠を取り返して下さい、珠の這入つて居る瓶は貴君が河の中で無くしたものです」

己れ曲者とムツク先生飛び出して、ワングの肩をムヅと許りに掴んだ、

「さあ其の本と瓶を渡せ、否應云ふと貴様の頭が胴から離れるぞ」

驚ろいたの驚ろかんのといふて藪から棒にとんだ野郎が出て來たと一生懸命爭つたけれども、とてもムツクの敵手ではない。

「命許りは許して下さい」と、弱音を出した。

ムツクは瓶をもがき取つてポケットへ入れたが此の時一方の手が弛んだものか、ワングは鰻の樣にヌル〳〵とこけて逃げ出した。

ヌル〳〵と逃げた鰻は不運にも腕力界に隱れないスピールバーゲルのおかみさん

の懷へ飛び込んで來た。

『窮鳥懷に入れば……』なんて氣の利いた格言を知らぬおかみさんは飛び込んだ鰻をいやといふ程撲り飛ばした。

目が眩んで居る間にムツクはとう〳〵書物を奪ひ取つた、野次馬がどや〳〵と押しかけて來た。

一人の巡査が、

「こら〳〵」

鰻先生、漸くの事でムツクの手から免れて穴へでも這入ればよいのに今度は巡査の兩腕の間に這入つた。

ムツクは瓶と記錄をレオンテインに握らせて、

「早く逃げなさい、私は貴女が五百弗後で吳れる事を信用して居ます」

レオンテインは雜踏を潛り拔け自働車を飛ばして市の閑靜の場所に在る自宅へ歸

つた、彼女の宅は小じんまりして居るけれども園丁と運轉手と二人の下女を使つて居るのでセヴアスチアンの如何なる襲撃にも大丈夫であつた。

セヴアスチアンは自分の身が危いから高飛して二度とレオンテインに近付かぬであらう。よしセヴアスチアンを捕へる事が出來ぬにしても、ラヴエンガーは彼れの有する秘密の魔力を以てヂヤリーの寃罪を天下に雪ぐ事が出來ると云ふて居つた。

それにしても彼れの有する魔力の秘密とは果して何であらう。彼れは今度會ふ時に何もかも話して聞かせると約束した、あゝ其の秘密を早く聽きたいものだ。

彼女は又久しく荒んで居つた胸中に美しい戀の華が咲いて來た事を思ふて獨り微笑を禁じ得なかつた。彼女はラヴエンガーが自分を愛して呉れると同じく眞に彼れを愛した、よしそれは數年前ヂヤリーを愛した程の熱烈はなくとも質實な眞情であつた、ヂヤリーは彼女にとつて只一人の愛人であつた、併し其の清い愛を汚す事なくしてラヴエンガーを愛する事が出來るのだ。世に斯の如き不思議の事があらうか

眞操は只一人に捧ぐる場合に於てのみ神聖であるのに、こんな矛盾した場合もあるのだ。

何の爲めであらう、外ではない、ヂヤリーとラヴエンガーを通ずる一種の不可思議なる交渉がある爲めである、

ラヴエンガーと交際する樣になつてから死せるヂヤリーを思ひ起す樣な事があつたのは一再にして止まらない、ヂヤリーが今まで生きて居つたら或は其の風丰がラヴエンガーに似て居るかも知れぬ。ラヴエンガーはヂヤリーの年經つたものと思へば間違ひはない、二人共男らしい、勇敢な、熱情ある男でラヴエンガーは昔の戀人ヂヤリーの人格そのものが溶け込んで居るものと思はれる。ラヴエンガーを愛する樣になつたのは、單に彼れの親切ありしが爲めのみではない。此の相似寄つた點が重きをなしたのかも知れない。

ヂヤリーにして若し語あらしめば、必ずや何度も何度も生命を救つて呉れた人と

結婚する事を喜ぶであらう。彼れは決して其の愛人を生涯孤獨に泣かしむる事を欲しないだらう。

嬉しい胸を清楚な着物に包んでレオンテインは書齋でラヴエンガーを今か〳〵と待つて居つた。すると、呼鈴も鳴らぬのに人の足音が聞えて來た、

ラヴエンガーの足音に違ひない――と思つて這入つて來た人を見るとこは如何に眼前に現はれた人はヂヤリーである！

驚ろきの眼を睜つてヂヤリーを凝視したレオンテインは言葉も頓には出なかつたヂヤリーは徐ろに口を開いて、

「私はラヴエンガーの爲めに今此處に現はれた、貴女は彼れを措いて身を托す人は此の世にない。生きて居る人の愛は死んだ者の記憶よりは優つてゐる」と、言ひ終つて彼れはレオンテインの見送するのを殘して室を去つて行つた。

夢か幻か。慥かに足音だけはしたが。

第四卷　靈の足音

靈の足音といふ事があり得べき事だらうか、やがて心の稍鎭まつたレオンテインは戸を開けて見た。ヂヤリーの影も見えぬ、只ラヴエンガーが彼方からやつて來る處であつた。

「あれは誰れでしたらう」と、恐怖の反動でレオンテインは無意識に訊いた。

「一體誰れの事を云つて居るのですか」

「此の戸口から今誰れか出て行つたのを御覽でしたらう」

「いや見ませんが、誰れを見たと思つたんです」

「ヂヤリー」と、一語をいつて泣き崩れた、

ラヴエンガーはレオンテインを抱く樣にして室に歸つた。レオンテインは涙をふきつゝ、

「**ヂヤリー**はどうか自分の事を忘れて呉れと墓から出て云ひました、そして生きて居る人の愛は死んだものゝ記憶に優ると告げて立去りました」

ラヴエンガーは**レオンテイン**を抱き締めて、

「**レオンテイン**さん」と、何か云はうとしたが言葉は續かなかつた。

「妾はどうしても彼れの名を清めなければならん」と、**レオンテイン**は兩手を握り合せながら云つた、**ラヴエンガー**は其の手を執つてキッスし、

「**レオンテイン**さん、まあお座りなさい。今私が豫て御約束の秘密を打明けたら其の目的を達するに好都合の方法を見出す事が出來ましやう。

＊　＊　＊

セヴアスチアンは今し、新たに雇ひ入れた、**ワング**の仲間の惡漢二人を集めて其の報告を聽いて居る處だつた。

「彼女の住所も突き留めました、書齋は庭に面した室ですが園丁も運轉手も一寸離

れた家に住んで居るから、裏口の方から忍び込めば下女二人丈けで邪魔する奴もありません」

セヴアスチアンは熱心に聞き了つて珠と記錄はどんな手段をしても奪り返さなければならん、マントは魔力を失つて全く不用の品となつた。若し珠と記錄さへ手に入れゝば或はマントを元の樣にする事が出來るかも知れんと心に思つた。

前日**ワング**が悄然と歸つて來て珠も記錄も奪られて仕舞つた事を話した時に**セヴアスチアン**は呆れて物も言ふ事が出來なかつた、そして**レオンテイン**の傍に居たといふスピールバーゲルのかみさんと**ムツクガイア**を適切り自分を見張つて居る探偵と想像した。

これは機先を制しなければならん、市中何れの警察でも懸賞で自分を探索してゐる、早く瓶と記錄を奪り返して其の上**ラヴエンガー**と**レオンテイン**を殺害し邪魔物を片付けなけりゝあならん。

よし其の秘密が手に入らんにした所がアルゼンチンの本國へ歸るまでだ。そして本國に歸つて慈善でも施せば世人に尊敬さるゝ生活を送る事も出來る。アルゼンチンには『慈善は衆惡を滅す』といふ諺がある。

丁度其の時待て居つたワングが這入つて來た。

「旦那、レオンテインが窓際に腰掛けて誰れか待つてゐる樣子ですから捕へるなら今ですせ」

セヴアスチアンは彼女の待つて居るのはラヴエンガーだと直覺した。それならば好都合だ。二人共一度に占めてやらう。そして瓶と記錄を奪ひ、思ひ切つた復讐してやらう。彼れは今こそ一擧にして望を達する時機到來と喜んだ。

「さあ皆出掛けやう」

セヴアスチアンはこういつて三人の惡漢と離れ〳〵に此の家を出で、或地點で又合した。

彼等はレオンテインの家をセヴアスチアンに敎へた。此の家といふのは、町の閑靜な場所にある庭付の建物で背後の方には使はない厩などがあつた。

夜の帳はもう垂れんとして居つた。セヴアスチアンが小聲で一人の男に何か云ふと、彼れは家の背後へ廻つた。

時を計つてセヴアスチアンと他の二人を從へて小舍の前を拔け、植込の間から書齋の前に出た。

テーブルを挾んで親しげに話して居るのはレオンテインとラヴエンガーとである

セヴアスチアンの胸は躍らざるを得なかつた。

眼を凝らして見て居るとラヴエンガーはブラシを何か溶液の這入つた瓶に漬けそれから壺に何か塗つて居るらしい。すると不思議にも其の塗つた所だけは薄くなつて恰も新月の光る部分にかけた部分が着いて居る樣な工合に見えた。

「占めた」と、セヴアスチアンは仲間に云つた。

惡漢共は窓際に來てナイフで窓をこじり開けて忍び込んだ。**セヴアスチアン**も之に續いた。

各々ピストルを手にして**レオンテイン**は書齋の入口まで來た。扉は半分開いて居るので皆が這入らうとしたが、**セヴアスチアン**は之を制して密と**ラヴエンガー**の說明を聽いて居つた。

半分間經つか經たぬに**ラヴエンガー**と**レオンテイン**は彼れを見付けて立上つた、**ラヴエンガー**は決然として**レオンテイン**に命じた、

「記錄と珠とを燒き捨てゝ仕舞ひなさい」

第五卷　燒き捨てゝ下さい

書齋では**ラヴエンガー**が**レオンテイン**に秘密の說明を始めて居つた。

「今日まで『絕對的黑色』といふものは存在して居りませんでした。通常吾々の稱

して黑といふて居るのは眞の黑ではありません絕對黑は光線を反射しないから眼に見えないのです。凡そ物體は光線を反射して始めて吾々の眼に映ずるものです」といふてポケットから小さい黑色の壺を出し、

「これは一般に黑色と稱されて居りますが、これは相對的黑色です、處で……」と、更に小さい瓶を取り出し、

「これはジヨセフデツキスター氏發明の黑色塗料の溶液ですが、多少空氣に觸れましたから絕對的黑色とは申されませんが、それでも普通の黑より幾千倍黑いか解りません、これを一寸壺に塗つて見ましやう」と、手早く塗ると其の部分はうつすりと殆んど見えなくなつた。

「未だ多少見えますのは塗料が新鮮でないからです。マントも塗りたてには全く見えませんが空氣中に暴露して置くと其の効力を失つて仕舞ひます、此の事は前に云ひませんでしたらうか。幸ひに私共の用ゐて居る間は大丈夫見えませんでした」

彼れは尙説明を續け、

「さて此の壺の塗らない部分に今度は新鮮な溶液を塗つて見ましやう」

新らしい溶液を塗つた部分は全く見えなくなつた。それから先のうつすりした部分へも塗ると壺は一向あるかないか解らなくなつた。

そこでラヴエンガーは壺を下に落した。微塵に碎かれた内側の方のみ白く見えた彼れは破片をテーブルに集め、

「こんな試驗を御覽に入れたのは、これから讀み上げるデツキスター氏の記錄に信を置いて頂く樣に只其の威力の一斑を示した迄です。さて愈々記錄の研究に取りかかりましやう。此の黑き珠は余が數年間研究の後漸く發明したる『絕對的黑色』を表現するものにして之を蒸溜水に溶解し、如何なる物體にても塗る時には肉眼に見えざる力を……」と、こゝまで讀んで來た時に二人はセヴアスチアンを認めたのであつた。

「レオンテインさん、記錄と珠とを燒き捨てなさい」

セヴアスチアンが侵入して來るからには必ず仲間を連れて來たに違ひないと察した、ラヴエンガーは事態容易ならずと果斷を用ひた。彼れはセヴアスチアンの顏に一擊を加へたので、其のひるむ隙を窺つてレオンテインと珠と記錄を持つて逃げ出した。二人の惡漢が後を追ふたけれどもラヴエンガーは戸を鎖して遮つた。

惡漢の一人はピストルを拔いてラヴエンガーに突き付けたが彼れは驚ろくべき沈着を以てそれを奪ひ、ズトンと一發發射した、彈丸は誤たず頭を射たので仰向けに倒れて息絕えた。

之を見たる二人の惡漢はラヴエンガーに飛びかゝつた。

レオンテインの方では、園丁と運轉手に急を告げやうと裏口から逃げ出したが、生憎其の途中にもう一人の惡漢が立番をして居るので、急に踵を返して書齋の隣りの化粧室へ驅け込んで、瓶と記錄とを爐の中へ投げ入れた。

時しも夏の事であるから火の氣はなかつたけれども、棚の上にマッチと椅子の上に其の日の新聞とがあつた。

廊下に惡漢の足音がしたので彼女は戸に錠を下した。ラヴエンガーは今や必死の格闘をして居る事も解つた。

彼女は先づ珠と記錄を燒き捨てゝから助太刀に行かうと只管氣を焦燥つて新聞に火を點じ、珠を其の上に置き記錄は一枚〳〵剝ぎ取つて燃し始めた。

廊下の格闘は益々〳〵烈しくなつた。

ラヴエンガーとセヴアスチアンは組んだ儘揉み合つて居るのでワングは只其の周圍をぐる〳〵廻りつゝ機會あつたらラヴエンガーに一彈を加へやうと狙つてゐる。やがてラヴエンガーの形勢がよくなつて來てセヴアスチアンを突き飛ばした。ワングの乘ずべき機會が來たのだ。一彈はラヴエンガーの頭を掠めてうなつた。

ラヴエンガーはワングを撲り付けてピストルを奪ひセヴアスチアンを狙つた。

二人は茲にピストルの撃ち合ひを始めた。

セヴアスチアンの彈は敵の髪の毛を射て拔き取つた。ラヴエンガーの彈は徒らに空を撃つのみであつた。

第六卷　髣髴たる愛人の姿

セヴアスチアンの彈丸は盡きて仕舞つた。ラヴエンガーは未だ撃つ事が出來るのでセヴアスチアンは絶對絶命力をこめて相手の頭を撲り付け、其のひるむのに付け込んで續け樣に打つた。

ラヴエンガーは目が眩んで家が廻る樣に見える。丁度傷いた鬪牛の樣に暴れ廻つたが、彼れは其の間にも相手の顏に自分を殺して仕舞はうといふ堅い決心の色を讀んだのである。

先刻の仇討ちは此處ぞとワングはセヴアスチアンと共にラヴエンガーを蹴飛ばし

たので、憐むべし彼れは一聲呻ると共に氣を失ふて仕舞つた。

「殺つ付けて仕舞ひましやう」と、ワングは促した。セヴアスチアンはピストルで擊ち殺さうか、それとも柄で撲り殺さうかと倒れたラヴエンガーの側で考へて居つた。

實に危機一髪といふ時である、其の時背後の扉が開いて園丁が這入つて來た。彼れは銃聲を聞き付けて馳けて來たのだが直ぐ事情を見て取つて電光石火、セヴアスチアンに引金を引く餘裕も與へず身を飜して助勢を呼びに行つた。

セヴアスチアンはワングを促してレオンテインの室へ進んだ。最後の一獣をラヴエンガーに加へずに、

「早く！愚圖〳〵しては居られん」と、彼れは怒鳴つた。

一方に於てはもう一人の惡漢がレオンテインの這入つた室を破らうとしたけれども力及ばなかつたので庭をうろついて居つたが、セヴアスチアンは之を呼び入れた

「さあ力を協はして……」と、一同肩を揃へて押したので、さしもの扉もメリメリと開いたが其の時レオンテインは丁度爐に記錄の最後の一枚を燒く處であつた。珠は既に燒けて炭の樣になつて居つた。

セヴアスチアンはレオンテインを押し除けて爐の所へ行つて見た。惜むべし、時機は既に遲い。こんな事なればラヴエンガーを仕留めてから來ればよかつた。と彼れは爐の中にこびり着いて居る珠の燃え殘りと記錄の灰を怨めしさうに見た。

燃え殘りても或は効力があるかと思つてセヴアスチアンはそれを剝がして見た。ほんの爪の垢ほどしかとれない。彼れは怒心頭に發して、レオンテインに對した。

「此の復讐は必ずしてやる！」と、彼女の口の邊に一擊を加へたので彼女は床に倒れた。

彼女は靜かに立つてセヴアスチアンを睨み付けた、人格的威力が光の如く彼女から輝き出た。自分は此の女を名義丈けの妻としてから絶えずヂヤリーに關する舊惡

を暴露されやしないかと恐れて居つた。それは物質的原因に基くものであつた。

併し今彼女から發した威嚴は人格的のものである。一指も之を犯す事の出來ない樣に天使が護つてゐるものゝ如くであつた。

今や罪の報復が身に迫るが如く感じた。そして自分の生涯が根底から覆された樣な氣がした。

惡漢共は**セヴアスチアン**と殺された仲間を取り殘して逃げ去つて仕舞つた。

セヴアスチアンの計畫は悉く水泡に歸した。マントがあつたとて魔力を失つた以上は無用の長物だ。珠も記錄も灰燼に歸して仕舞つた。又何を以て罪の身を救ふ事が出來やう。

外には園丁と運轉手とが何か怒鳴り散らして居る。內には下女が叫んで居る。誰れか警察へ急告して居るらしい。四面正に楚歌の聲だ。

セヴアスチアンは身輕に窓から飛び降りて厩の間から街の方へと逃げ出した。

變事を聞いて驅け付けた園丁と運轉手とが廊下に來て見るとレオンテインが唇から血が出て居るのもかまわずに氣絕して居る、**ラヴエンガー**を介抱して居る處だつた。

ラヴエンガーの口鬚は半分剃げて下から綺麗に剃つた肌が見えて居る。一寸引つ張つたら他の半分も容易くとれた。假鬚であつたのだ。

加之彼れは鬘を冠つて居つた、顏は三十歲を少し越した位なのに髮のみは灰色であつたのでいつもレオンテインは不思議に思つて居つたのが始めて其の眞相が解つた。

彼女は鬘をとつて見た。

見よ！下に艶々しい若い髮の毛があるではないか。

更に見よ!!其の髣髴たるチヤリーの溫顏を！彼女は息を凝して眺め入つた。

此の時**ラヴエンガー**は漸く意識を回復し始めた。彼れは少しく身を動かし、何か

口の中で物言つて、眼を見開いた。**レオンテイン**は**ラヴエンガー**の頭を膝に乘せて勞はりつゝ繃帶を施してやつた。

第十五篇　大團圓

第一卷　「救すは神なり」

漸く重圍を脱して隱れ家に歸つて來た**セヴアスチアン**は溜息しつゝ身の過去未來を考ふるのであつた。罪、罪を生むといふ事があるが自分の踏んで來た罪惡史は正にそれであつた。自分は生來の惡人では決してない。**レオンテイン**に遭ふて戀に囚はれなかつたら、父の巨萬の遺產を繼ぐ平和な大地主として幸福な生活を送つて居つたかも知れないのだ。時々表を通る自働車の響が若し警察のではなからうかと彼れの膽を寒からしめた。

彼れは再び過去の追想に耽つた。**レオンテイン**を獲るには其の婚約の愛人**ヂヤリ**

ーカーゾンを葬つて仕舞はなければならぬと陰險な手段を弄して彼れを終身懲役の苦刑に陥れて牢死せしめた。

そこで愈々レオンテインを妻にしたものゝそれはほんの自分丈の話で愛の滿足を得るに由なかつた。

それからと言ふものは罪に罪を重ねて遂に今日の如き奈落の底に陥つた。

幻影の如く彼れの眼前に顯はるゝものは、十三階の高きより突き落した「海坊主」のルイである。次に立つものは山中の獵番小舍でダイナマイトに其の珠の肌を落花微塵と碎きたるビアンカの姿である。嘲るが如く罵るが如く宇宙に彷徨する魂魄は自分の良心に苛責の鞭を加へるのである。

セヴアスチアンは尙且つ凡てを運命の惡戯となして自ら其の罪を悔ゆる事を知らなかつた。これと同じ時にワングは此の家の二階で紙幣の束を勘定して居つたが、やがてポケットから一通の手紙を出し讀み行く內に彼れの相格は崩れた。

手紙にはこう書いてある。

茲に夫セヴアスチアンの隱家を密告なし下されし報酬として御約束通り金子同封差上申候貴君の御行動は實に社會の爲め警察の爲め天晴なる御行動と存候。

署名はレオンテインとある。警察からお譽めを戴いたからとて餘り嬉しい事はないが、金と來ては何よりの好物と彼れは一人笑壺に入つた。而し金の爲めにセヴアスチアンを裏切つた事は餘り氣持の好い話でもない。

同じ心は階下に居るセヴアスチアンにも宿つた。

彼れはヂヤリーを地獄の底に落した事に就て流石良心の苛責に苦しんで居る時にふと背後を顧ると其處にヂヤリーカーゾンが嚴然として突つ立つて居つた。それは南米のデルガド港で彼れの弟が死んだ時の光景其の儘の姿である。

彼れは兩手で顏を掩ふて見まいと努めた。

「君は誰か？ヂヤリーではあるまい。ヂヤリーは死んで水葬せられた筈だ。君は幽

霊か……それとも」

チヤリーは冷かに笑つて、

「君が此の室を出て行くと僕が幽霊か、否かト解る」と、答へた。

セヴアスチアンはそれに應じないで窓の方へ行つて見て驚ろいた。門前に一臺の自働車が停つて居つたが中から三人の官服の巡査と一婦人とが降りて來る所であつた。遠目にも其の婦人が**レオンテイン**だと判つた時に彼れは憤怒に思はず拳を握りしめた。

彼れは窓際から引返して戸口の方へ來た。其處には**チヤリーカーゾン**が從容としてピストルを向けて居る。

彼れは今や挾み討ちの態となつたのだ。

セヴアスチアンは意氣全く挫けて、

「許して下さい」と、跪いて泣言を云つた。捕手が迫るに從つて彼れは益々狂氣

の樣に嘆願した。

チヤリーカーゾンは漫に測隱の情を起した。自分が之迄此の男の爲めに嘗めた苦痛は言語に絶して居る。彼れは自分に證書僞造の罪名を負はした。而して遂に永久の暗黒界に陷れた。數年の間自分の胸中に在るものは只復讐の一念のみであつた

復讐！血の復讐!!遺恨十年一劍を磨いて居つたのである。遂に其の待ちに待つた復讐の機會は到來して居る。機會は到來したが、彼れの心は鈍つた『赦すは神なり』彼れは聖に非ずして又何であらう。

チヤリーは徐ろに口を開いて、

「僕の目的は自分の冤を雪ぐにある。君を牢に繫ぐ事でない。只此の自白書に署名して吳れ給へ。そうすれば僕に關する君の罪丈は赦してやる。其の他の罪に關して君適當の處置を採り給へ」と、云ふて渡した書類を**セヴアスチアン**は飛び付く樣に開いて讀んだ。豫想外細々と彼れの過去の犯罪が記してある。これに署名しては到

底生命は助からぬと思つた。

彼れは躊躇した。こんな切迫した場合にも尙ほ誤魔化さうと思案を廻らして居る

チヤリーは門前を指して、

「それでもあの方へ……」

砂利道を足音がして戸をノックする者がある。

セヴアスチアンは大急ぎで署名して逃げ出した。出て行く時に振り返つた彼れは丁度豺狼の樣に齒をむき出した。

チヤリーは其の書類をポケットに收め靜かに戸を明けて出て行つた。

第二卷　一發彼の腦を……

セヴアスチアンの隱家には腹心の職人が秘密に作つた地下室が有つた。常々から食糧も貯藏じいさと云ふ場合に此處に籠らうと云ふ計畫であつた。勿論仲間のワン

グにも知らしてはなかつた。

室を逃げ出した**セヴアスチアン**は振返つて見るに**チヤリー**が彼方へ引返して警官やレオンテインを導き入れて居る處であつたのでそれを見濟まして秘密地下室へ潛り込んだ。暗黑の中で耳を聳てゝ聞いて居ると警官がどや〳〵と家の中へ押し込んで來る音も聞え、やがて地下室の入口にも靴音がして石の隙から火光が洩れて來た

「此處に違ひない……」と、一警官は叫び乍ら降りて來て爐の背後や隅にあつた樽の中を改めて見た。**セヴアスチアン**は自分の心臟の皷動さへ聞き付けられやしないかと息を殺して蹲つて居つた。やがて巡査は見當らないので上つて行つて仕舞つた。

彼れは暫し四邊を見廻して居つたが、密つと地下室の蓋を持ち上げて覗いて見ると、**レオンテイン**と**ワング**が何か彼方の方で話して居る。**セヴアスチアン**はピストルを手にし音せぬやうにそこから出て二人の話して居る傍の薔薇の植込の中に身を

忍ばせた。彼れは怒りの爲めに恐れを忘れて仕舞つた。

憎いのはレオンテインである。更に憎いのは自分を賣つたワングの野郎である。

彼れは豹の如く忍び寄つて二人の話の聞える所まで來た。

「貴女は私のした事が社會の爲めと仰有いましたね。それもさうでしやうが私は金の爲めにやつたのです」と、いふワングの露骨な話にレオンテインは此の惡人に對して恐れ、思はず顏を顰めた。此の顏に顯はれた恐怖こそ彼女の生命を救ふたものであるといふ事は神ならぬ身の知る由もない。

どつちから先にやらうかとピストルを擬して居つたセヴアスチアンはワングを狙つて一發放した。彈は誤たず頭に命中してワングは斃れた。セヴアスチアンは又も其の罪惡史に一頁を書き增したのだ。しかし此の殺人がこれまでの中で最も理由あるものであつたかも知れない。

レオンテインの悲鳴を聽き付けて驅け付けた人々は惡鬼の如き相をしてピストル

を向けて居るセヴアスチアンを遠卷きにした。

セヴアスチアンはピストルをレオンテインに向けたけれども、曾て生命までもと惚れ拔いた女を一發の下に殺す事は流石に躊躇した。彼れは思はず眼を薔薇の植込に注いだ。

其處にはこれまで殺した人々の姿が朦朧として立つて居つた。今殺して身體の冷え切らんで脚下に斃れて居るワングの幽靈まで加はつた。

彼れは幽靈の鋭い眼光に射すくめられて薔薇の植込を拔けて逃亡した。

第三卷　セバアスチアンの死

セヴアスチアンは逃げ出したが追手は逃がさじと之を追ふた。道は河に沿ふた峻はしい岩山に走つて居る。此の邊の地理に詳しい彼れはあの曲角を廻れば森の中へ這入つて追手を撒く事が出來ると信じた。

彼れは樹の幹の蔭にかくれて、やつて來る追手を一人づゝ狙撃してやらうかとも考へた。が既にピストルの彈を撃ち盡し、おまけにポケットに入れて置いた彈丸は薔薇の植込の蔭で劬ふた時落して仕舞つた事が判つた。

いくら口惜しがつても及ばない。彼れは曲り角で背後を振り返つて見た。追手の先登と自分との間は僅か百五十間しかないので、森の中へ感付かれぬ樣に身をかくすには既に時期が遲かつた。

處か彼れの行手の道の中央にチヤリーが矗然として立つて居つた。驚ろくまい事か、餘り急に止まつたのでセヴアスチアンは前へのめつて仕舞つた。彼れが漸く起ち上つた時にチヤリーは河の方へ行く岐路へ手を以てさしまねいた。

振り返つて見ると警官は百歩位まで接近して、

「止れ〳〵」と、叫びながら追つて來る。彼れは自暴自棄の勇を揮つて走りつゝけた。

チヤリーの姿はパッキリと現はれて、嚴然として岐路の方へ手招ぎするので、彼れはつい釣り込まれて其方へ下りて行つた、

愈々河が眼前に現はれた。あゝ謀られた！斷崖の所でとう〳〵行き詰つて仕舞つた。

以前は此の徑は對岸の森へ渡れる樣になつて居つたのだが二年前の地辷りで絶壁となつたのだ。

斷崖の縁でセヴアスチアンは立停つた。追手は五十歩も背後まで迫つて、歡聲を揚げてやつて來る。

今まで彼れの前に動いて居つたチヤリーの姿は此の時忽然として消失した。氣の迷ひで自ら破滅の窮地に陷つた。よし此の上は我が最後を出來得る丈け華々しくやらう。

一番先登の一警吏は十歩の所でピストルを突き付けて、

「神妙にせい……」と、叫んだ。

セヴアスチアンは其の絶壁から身を躍らして飛び降りた。彼れの身は羽根の樣に旋りつゝ、しばらく經つてから岩の上に落ちる音が、追手の耳に達した。

崖から遙か下の方を覗いて見ると**セヴアスチアン**の滅茶〳〵になつた遺骸は渦卷く急流の魔の叫びに送られて暗き大海の底の方へと流され行くのであつた。

＊　＊　＊

「彼れが確かに死んだ事を斷言出來ますか」

「**ナヴアル**夫人、決して間違のある道理はありません。崖から飛び降りて、それから海の方へ流されて行くのを見ました。あの高い所から飛び降りて生きられる筈はありません」

「どうも難有う」と、**レオンテイン**が一禮したので警官等は引取つた。彼等は妻としてどうしてあんなに冷然と夫の死を聽いて居る事が出來るだらうと驚ろいた。しかしこれはいかに彼女がこれまで**セヴアスチアン**に苦しめられたか解せぬ人の評だ

其の後遲く電話で**セヴアスチアン**の死が眞實である事が確められた。死骸が河口の附近の海岸で發見せられたのである。清淨なる大海は此の罪惡に汚れた**セヴアスチアン**の死骸を拒んだものかも知れぬ。

セヴアスチアンは全く死んで仕舞つた。**レオンテイン**は之を聽いて**ヂヤリー**の名を清める機會が永久に去つた事を思ふて泣き沈んだ。

其の時彼女の肩をちよつと突いたものがある。**ラヴエンガー**だ。いつも危急に頻する時、悲哀に沈む時慰めて呉れる**ラヴエンガー**なので彼女は些の恐れをも起さない。しかし生涯の唯一の望が粉碎されて仕舞つた失望を**ラヴエンガー**と雖も慰める事は出來ない。

第四卷　青天白日の身

ラヴエンガーはセヴアスチアンの自署ある自白書を取り出して、

「絶、絶黒色の塗料の少し殘つて居るのを利用して此の自白書を手に入れる事が出來ました」

レオンテインがそれを取り上げて見ると彼れの罪惡が洩れなく記してある。

ヂヤリーカーゾンに欺僞取財の罪名を負はし、延いて余の弟ディゴの死の原因を惹起したる受領證は贋造せるものなりき。余は署名を僞書せる報酬として「海坊主」のルイに一千弗を支拂ひたり。これ皆余自身の罪にして、ヂヤリーカーゾンは清淨潔白の身なり

レオンテインの眼には涙の露が宿つた。靜かに顏をもたげてラヴエンガーを見た彼女は思はず叫聲を發した。此の前彼女はもしやそれではないかと思つた事もあるしかしそんな事が世にあり得べき事でないので胸底深く秘めて置いた。所が今は確かにそれと判つた。

「ヂヤリー……」と、制し切れずに彼女は叫んだ。

ラヴエンガーのヂヤリーは彼女を抱き締めた。唇に唇を當てゝ、

「レオンテインさん、貴女はとう〳〵私の物だ。永く待つたねい」

感慨の極度には物も言へぬものだ。レオンテインは永く〳〵戀慕つた胸に抱かれて身も世も打忘れて仕舞つた。

しばらく經つて彼女は口を開いた。

「これで貴君は青天白日の身となりました。たとへ脫獄の重罪人でもこれさへあれば身の潔白を證して世間を濶歩する事が出來ます」

ヂヤリーは感慨深き面容にて、

「又私にとつてはそれより嬉しい事があります。貴女は友白髮となるまで私のものとなつて過去の苦しさは一場の夢と忘るゝ事が出來ます」

茲に讀者諸君に遡つて申し上げねばならぬ事は、囚徒護送船を逃れて南太西洋の一孤島『狂神巖』に漂着し大章魚の爲めに大海に引込まれたヂヤリーが如何にして紐育の都に顯はれたかといふ物語である。

ヂヤリーは深い一呼吸する間もなく章魚の爲めに海中へ引込まれた。眼を開けて見れば何も見えない。其の譯である。章魚は黑い墨汁を一面に吐き散らした。

ヂヤリーの手先に岩の突角が觸れたので彼れは生命がけで縋り付いた。章魚もさるもの、ヂヤリーを抱え込んで腕も拔けよと引張つた。

手を離したら大變だ。海底深く引き込まれて御陀佛となるのは定つた話だ。彼れは片手にて帶からナイフを拔き出してからみ付いて居る章魚の脚に切り付けた。

ヂヤリーが其の脚を切り取つて海面へ浮び出やうとした時に黑い水の中から第二の脚が出て來て茲に海底の格鬪が又も始まつた。第二の足を切り離つたら更に第三の脚がからみ付いた。ヂヤリーは殆んど力盡きんとした。多數の吸盤で吸ひ着けら

れるので處々から血が滲み出る、漸くの事で第三の脚を切つて水面へ浮んで來た彼れはホッと一息した。此處は陸から二十尺程離れた岩だ。彼れが此の岩に縋り付いて休んで居ると、章魚は折角の餌食を失ふてなるものかといふ勢ひで三本の脚を以て一度にからみ付き又も海底へ引き入れやうとした。

彼れには最早や一本の脚さへ切り離す力はなかつた。只引かるゝ儘に海底へ行くと息もだん〳〵塞つて來て氣も遠くなつて來た。處が眩む彼れの眼の前に底光りのする眼が現はれて、鷲の嘴の樣な口が開いた。章魚の頭だ。

彼れは最後の勇氣を振ひ起して其の頭を滅多突きにした。からんだ脚を靜かに離して怪物は海の底へ死骸を横へた。

危い所を脱れたヂヤリーは死んだ樣になつて濱邊に倒れたまゝ深い眠りに陷つて仕舞つた。

第五卷　黑い珠の溶液

數時間の後眼を開いたヂヤリーは岸に打上げられた章魚の死骸を見入つて、自分が一髮の危機を逃れて生命を完うし得た其の間には何か神の攝理がなければならぬと感じた。

先づ第一にすべきはヘンリー、モルガン卿の遺寶を發堀する事である、第二にはそれを利用してレオンテインを取戻す事である。彼れは秩序を立てゝ其の目的の遂行を謀つた。彼れは岩から貽貝を採つて食となし。岩間の清水を飲んで渴を免れたデツキスター氏の貯藏して居つた食糧は永年の風雨の爲め用をなさなかつたのである。

あの地獄の樣な集治監から逃れたと思ふと彼れは身も心ものびゝして困苦の中にも數日の內に氣力をすつかり回復した。そこでデツキスター氏の遺骸を懇ろに葬

つて石塔を立て、それから記錄に依つて寶の在所を發堀した所が、生涯を充分支ふるに足る財寶を發見した。

財寶といふのは古代の金貨、金の延棒、金製の置物で此の海上王が掠めた財貨を他日の用に貯藏して居つたのだ。手にさげて計つて見ると凡そ三百封もあつたらう時價にしたら八萬弗位である。

此の財寶は岩窟中の櫃の中へ收めてあつたが、デツキスター氏は之れに手も觸れずに、主として『絕對的黑色』の研究に沒頭したらしかつた。此の事は彼れの記錄を一讀すると判る事で、其の研究の結果が即ち三つの珠となつてヂヤリーのラヴエンガーが隨所にセヴアスチアンを惱ました魔力を現はしたものだ。

吾々が日常用ゆるインキやペンキが絕對的黑色であるならば眼に見えぬ筈であるが。眼に見える譯は其の色が種々の色の結合したものに過ぎぬ證據である。理論上の黑色は光線を反射せず、屈折せず、故に眼に見ゆる道理がないとデツキスター氏

の記錄に說明してある。

チヤリーは彼れの殘した絕對黑の三つの珠に依つて此の『狂神巖』を逃れる事を得た。

彼れが此の孤島に漂着してから一年位經た或る日の事ブラジル國の捕鯨船が淡水を積み込む爲めに此の島に上陸した。水夫等は此の濱で捕獲した澤山の鯨から鯨油を汲み取つてボートに積み本船へ數回往復したが、其の內に**チヤリー**は身體と財寶の這入つた袋とを例の黑い珠の溶液ですつかり塗つてボートの中へ忍び込んだ。水夫等はそんな人間が乘り込んだとも知らず大層重いなあと小言云ひつゝ本船へ漕いで行つた。

捕鯨船の上で**チヤリー**は食糧やら衣類やらを盜んだ。しかしいつでも其の代りに小さい金塊を置いて來るのであつた。水夫等は只不思議の念に驅られて居つた。

彼れは愛する**レオンテイン**が**セヴアスチアン**と餘儀なく結婚した事を聞いて此の

上は『護る影』となつて彼女の身を保護してやらうと**ラヴエンガー**なる一怪人物となつて紐育の都に入り込み活躍し來つたのである。

第六卷　一番幸福な日です

南米アルゼンチンの**レオンテイン**の父なる**ジヨン、ウオルコツト**は三十年振りで生れ故郷の米本國に歸つて來た。丁度浦島太郎が龍宮から歸つて來た樣なもので、生れ故郷とは云ひながら恰も異郷に在るの思ひがした。三十年の永い星霜をアルゼンチンのデルカド港に送り相當の資產を作り上げたが、相場に手を出したので一度は家運を傾けた。それを挽回しやうと思つて彼れは**セヴアスチアン**に自分の娘を呉れやうとしたが相思の間なる**チヤリーカーゾン**が邪魔になるので、**セヴアスチアン**の意を迎へて娘を說破し、兎に角名目丈けでも妻にさせた。

親爺の古い頭ではこうして一緒にして置けば必らず愛情も湧くものと合點して居

つたのが、其の後紐育からの風の便りでは夫婦間が面白くない事を耳にして多少は氣に懸つたが、**セヴアスチアン**から引出した資本で商賣の方はとん〳〵拍子で儲かるのでいくらか紛れて居つた。然るに續々紐育から知己が面白からぬ風説を齎らして來るので一度行つて娘に會つて樣子を實際見樣と、家財を賣拂つて店を仕舞ひ、出發の準備にとりかゝつた。

其の矢先、驚ろくべき一の情報は彼れの出發を急がした。

セヴアスチアンは殺人犯人として追跡せられて居る間に自殺して仕舞つたと。そして遺書がなかつた爲め遺産全部は殘らず妻の**レオンテイン**に歸したと。

ジョン親爺は紐育へ來て、南米人の巢窟なるワルドルフ旅館へ宿をとつた。そして警察へこれから**レオンテイン**の捜索願を出さうと、今一服して長途の勞れを休めて居る處であつた。すると自分の名を呼ぶものがある、眼を擧げて見ると**チヤリーカーソン**が片手を擴げて自分の前に立つて居る。

親爺は腰も拔かさん許りに驚ろいて、物も言ふ事が出來なかつた。

「驚ろくには及びません。私です。幽靈ではありません。何時紐育へ入らつしやいました」

「ど、どうして、貴君は……」

「お話すれば長い事です。だがもう少し經つとすつかり判ります。兎に角私ば今青天白日の身である事を斷言します」

「何卒許して下さい。皆私が惡かつたんです」

「それはそれとして實は今日嫁を貰う事になつて居るんですがお立會下さいませんか」

「貴君が結婚？何時？」

「十分の後です。私の嫁は不幸にして親兄弟のない身ですから貴下にお立會を願ひ度いので……」

親父は娘持つ身の身につまされて流石に涙の落つるを禁じ得ない。

「あゝ今夜の花嫁がレオンテインならばと思ひます」と、ヂヤリーの手を握りしめ

「私の誤りで今は取り返しもつきません。兎に角御望み通り立會人となりましやう話は別ですが。若しや貴君はレオンテインの行衛を御存じありませんか。セヴアスチアンが死んでから、心掛りでなりません」

「決して心配なさるな」と、ヂヤリーは慰めた。

「今お取込みの最中他人の娘の事まで考へて居る餘裕もありますまい。さあまいりませう」

連れ立つて二階の大廣間へ來て見ると紳士淑女が花の樣に着飾つて式の始まるのを待つて居る。ジヨン親爺は贈られた花束の數を見て花嫁は大金持に違ひないと密かに驚ろいて居つた。

ヂヤリーは親爺を壇の傍に座を占めさせた。

やがて花嫁は盛裝して多くの侍女を隨へて靜々と式場に這入つて來た。

「よく娘に似て居るなあ」と、親爺は片唾を呑んだ。

處が壇の下に來るに及んで確かに娘といふ事が判つたので親爺は、

「おゝレオンテインや」と、いつたきり老の眼には早涙である。

豫てかくあらんと覺悟して居たレオンテインも父の胸に縋つて心行く許り泣いた

親爺は漸く涙を拭いて最も嚴かに、

「今日は私の生涯中一番幸福な日です。神樣は必ず此の若夫婦の前途を祝福して下さるでせう」

かくて暴風雨に踏み蹂られんとした戀の芽は、生長して茲に美くしい花と咲き匂つたのである。

露光量違いの為重複撮影

魔？人？原作護る影終

Made in japan

大正六年五月十一日印刷
大正六年五月十五日發行

定價金六拾錢

譯者　天然色活動寫眞株式會社編輯局

發行者　東京市芝區三田三丁目七番地　神谷竹之輔

發行者　東京市淺草區福井町一丁目一番地　池村鶴吉

印刷者　東京市神田區表神保町十番地　今成溫平

不許複製
護る影
奥付

發行所

東京市日本橋區柳原河岸二號地
振替東京壹壹壹壹六　電話濱花四八八三番　三芳屋書店

東京市淺草區福井町一丁目一番地
振替東京六一三三番　電話下谷四〇八一番　松陽堂書店

露光量違いの為重複撮影

魔？？人？

原作護る影 終

Made in japan

大正六年五月十一日印刷
大正六年五月十五日發行

定價金六拾錢

譯者　天然色活動寫眞株式會社編輯局

發行者　東京市芝區三田三丁目七番地　神谷竹之輔

發行者　東京市淺草區福井町一丁目一番地　池村鶴吉

印刷者　東京市神田區表神保町十番地　今成溫平

不許複製
護る影
奥付

發行所

東京市日本橋區柳原河岸二號地
振替東京壹壹壹六　電話濱花四八八三番　三芳屋書店

東京市淺草區福井町一丁目一番地
振替東京六一三三番　電話下谷四〇八一番　松陽堂書店

天活會社編輯局編述　口繪活動映畫寫眞版二十八面入

活動小說

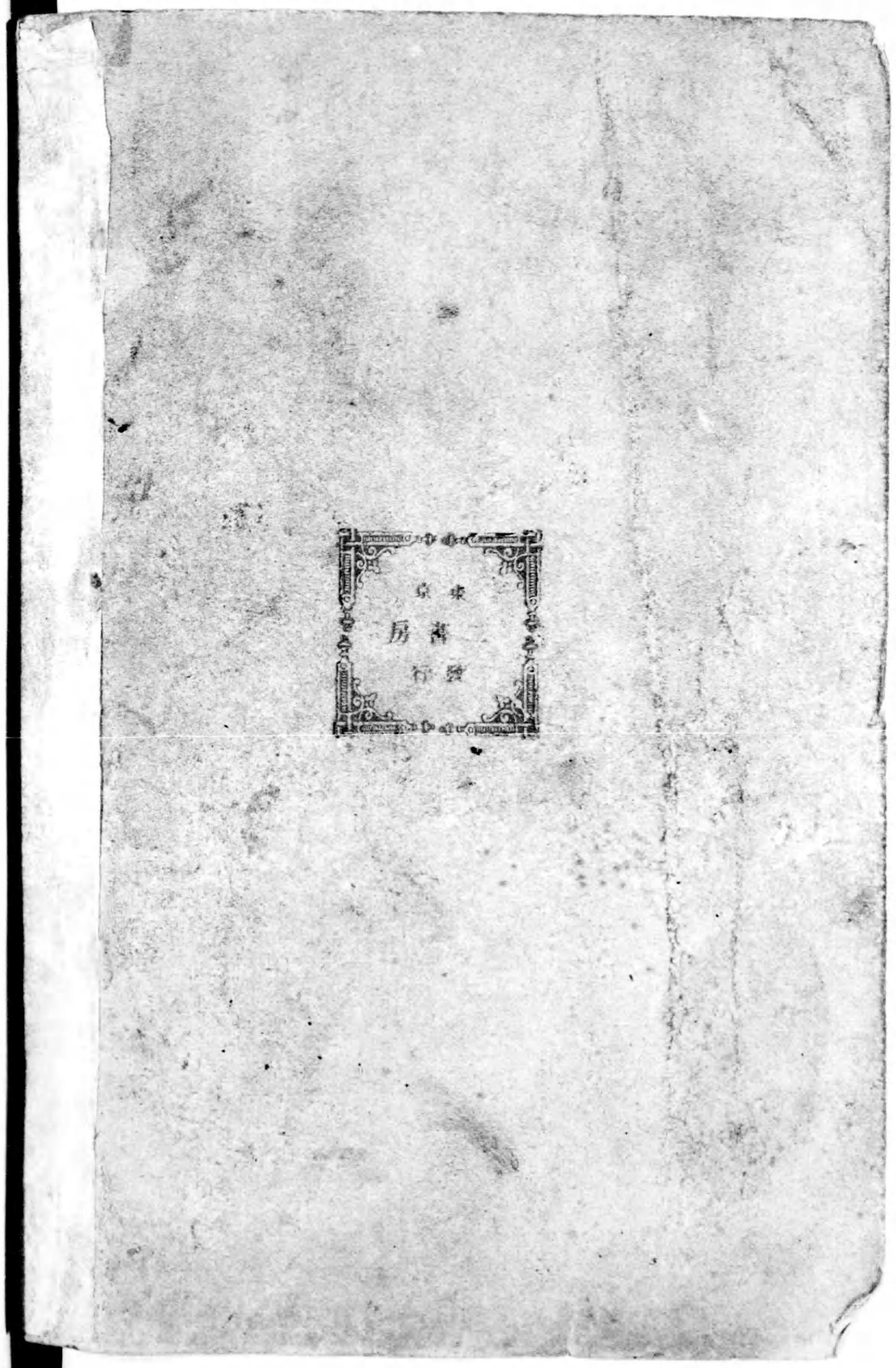
金剛圓

忽三版

素洲書伯裝幀
全一冊讀切
定價金二十錢
郵稅金四錢

懸賞金貳萬圓附の世界的名脚本
世界の子女を惱殺せる大ロマンス
延長十二哩卅篇六十二卷大寫眞
報知新聞大賞讃最高評略筋連載

天活直營淺草キネマ
倶樂部連續封切中レ
コード破りの大入尙
目下全國各館上場中

277
27

終